

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

50年を機に安全登山を誓う・・・西穂高岳で

50年前の1967（昭和42）年8月1日、僕の記憶が定かならば、その日は朝から暑い日であった。松本市内では、午前中から積乱雲が発達し、猛烈な夕立となり、激しい雷鳴が地を轟かせた。

その日、松本深志高校の2年生は、学年登山で上高地から西穂高岳に登っていた。午後1時40分ごろ、西穂高岳山頂から下山中だった46人のパーティは西穂高岳の第11峰独立標高点（通称：西穂独標）付近で落雷に遭い、生徒11人が死亡、生徒と教員13名が重軽傷を負った。当時僕は7歳で小学校2年生だったが、たまたま自宅が松本深志高校の極めて近いところ（歩いて1分）にあった関係で、この事故の印象は強く刻み込まれている。

昨年まで深志高校で教員をされていたSさんは、当時パーティ後方にいた。事故から50年たったのを機に、信濃毎日新聞の取材に次のように答えている。「『雨具を用意しろ。』パーティ後方で引率教員から指示を受けた。西穂高岳山頂から下山する際、ザックからポンチョを出して着込んだ。雷の音がゴロゴロと響き、生徒たちはペースを早めた。頂上を出発して約1時間。独標に差し掛かった時、雷が今まで以上に近くなったと感じた。次の瞬間、記憶が途切れ、気づいたときには冷たい雨が身体をたたき、数メートル飛ばされていたことに気づいた。耳から血が滴り、教員がハンカチを当ててくれた。『こっちにも人が飛ばされている』『反応がない』前方では生徒たちの声が響いていた。身体がしびれて感覚がない。自分も雷が背中から足に抜けていたことは後で知った。生徒二人に支えられ西穂山荘に向かう。あちこちで動かなくなった友人たちが見えた。雨がやみ、西空の夕日を見て助かったと実感した。」

日本山岳史上に残るこの事故から今年で50年。個人的な感傷といわれるかもしれないが、私自身この事故で犠牲になった方々の後輩でもあり、高校現場で山に登るものとして、50年を機に当時の事故現場を訪れたいと思い、8月最後の日曜日の27日、西穂高岳に登ってきた。独標は、青空の下に惜しげもなくその姿をさらし、そのピークからは360度の眺望がほしいままであった。こんな素晴らしいところで起こった惨劇を思うと心が痛んだ。しかし、何防ぐものもないこの岩峰での落雷には人間の力のいかに無力なことかとも思わせるピーカンの独標であった。

今年3月には栃木県那須で春山の研修会



に参加していた高校生7名と教員1名の8名が雪崩で亡くなるという事故も起こっている。縁あってこの事故の検証委員も仰せつかっているが、安全登山のために、これらの事故を決して風化させずに語り継いでいくことが大切であると思った。

かつて、長野県内の多くの高校では学校登山が行われていた。現に私自身の高校時代を振り返ると、1年次にはクラスで徳本峠を越え、2年次涸沢に登った。私が高校教員になった今から30数年前にはその名残がまだあり、多くの学校で学校登山が行われていた。しかし、今や県内で学校登山を行っている学校は極めて少数になってしまった。

しかし、大町岳陽高校には、全校登山の伝統が連綿と続いている。北アルプスをバックヤードに持つという環境を活かした本当に素晴らしい学校行事である。この行事が、安全教育を原点に山の素晴らしさを教えるものとしてずっと続いていくことを願う。

西穂高岳は、独標から岩峰が始まる。その登り口には、ひっそりと安置された慰霊の碑がある。50年前に逝きし先輩たちの御霊を偲び、その碑に手を合わせて、安全登山の誓いを新たにしてきた。

高校生の冬山登山はどうなる？

栃木の雪崩事故から5か月が経過した。6月には雪崩事故の検証委員会から中間報告が出され、9月末とされる最終報告にむけての検討が進んでいる。最終報告では、事故の再発防止に向けた提言をすることになっており、現在その最終作業をしているところである。

事故後いちはやく長野県では、教育長が「登山に親しむのは非常に大切だが、前提として安全を保つための基準作りが必要である。冬山に入るのを一切禁止することはない。」と述べた。それを受けて、「高校生の冬山・春山登山における安全確保指針検討委員会」が立ち上がり、7月14日、9月1日と2回の会合が開かれた。委員会には、信州大学の鈴木啓助教授を委員長に有識者8名（校長会代表、高体連登山専門委員長、山岳総合センター所長、長野県山岳協会会長、遭難対策協会代表、山岳医代表、小生）で構成されている。小生は、国立登山研修所の専門調査委員という肩書での委嘱である。

会議は、教育長の発言に則って、「原則禁止されている高校生の冬山登山について、原則を外れて行う場合の安全確保指針を策定する」という方向で検討が進められている。安全に雪山（検討会では、冬山とはいわず「冬山・春山」という括りで議論している）を楽しむにはどうすればよいか？委員8名が知恵を絞りながら一生懸命検討をしている。9月22日には指針が示されることになっている。

閑話休題、新田次郎の「聖職の碑」の中で、事故後、遭難記念碑を立てることを県に訴える有賀という先生に県の担当者が学務課長（今の教育長にあたると思われる）の言葉として、「長野県は山国です。本県から山を取ったらなにが残るでしょうか、山をこどもたちの錬成の場と考えるのは同じです。学務課長もそのことについて反対してはおりません。周到な準備のもとに行われるならば、いっこうにかまわないと思います。登山は禁止などとは県の面目にかけてもできないことです。」と述べるくだりがある。もちろん、これは小説の中の話ではあるが、事実に基づいた話であり、碑も実際に立ち、それが現在の長野県の学校登山にもつながっている。雪崩事故の後、改めて「聖職の碑」を読んだ。時代も異なり、状況も違うが、共通する部分が多くある。このくだりもそうだが、検証委員として参考になる部分がいくつもあった。

